

「神の畑」(ルカ八章四〜一五節)

1 種まぎのたとえ

今日も一枚の絵から始めたいと思います。山梨県立美術館にあるミレーの有名な種蒔く人です。足を前後に開き、肩からかけた種入れ袋を左手でしっかりおさえて、右手を大きく振って種をまいています。まったく同じでないとしても、こんなイメージで今日の箇所を読み始めて間違いないと思います。

さてイエスの「種を蒔く人」のたとえです。もつとも有名なといってもよい、よく知られたたとえです。日曜学校、教会学校、あるいはキリスト教学校でも好んで取り上げられます。

よく取り上げられる、話として分かりやすい、その通りです。しかし本当にそうなのでしょうか。というのも弟子たちが話のあとで「このたとえはどんな意味か」と尋ねているからです。すぐには分からなかった。分かりすぎて、確かめるため聞く場合もあります。分かったようで分からなかった。弟子たちが質問してくれたおかげでイエスの解説を聞くことができます。あまたある譬えの中で、イエス自ら解説しているのはこのたとえだけです。

「たとえを用いてお話になった」というそのたとえそのものを、イエスの解説を聞く前に見ておく必要があります。

農夫の生活の中から、彼らの経験していることが、神の国(八・一)を表すたとえとして取り上げられます。種まぎ、まかれた種の生長・生育、そして収穫です。別の言い方をすれば、始まり、中間(途中)、終わりです。

種蒔く人はその始まりに関わります。種蒔く人が種まきに出て行きます。ミレーの絵のように彼は種を畑に直接ばらまく。彼は畑の真ん中に行ってまきます。大きく広く周辺にまき散らしています。種は風に飛ばされたりして、どこにいくか分かりません。ここには道端、石地、あるいは茨の中、そして良い土地と、種の落ちた場所が四つ上げてあります。もちろん種蒔く人は、畑でないとどこにいかないように注意してまいたはずですが、どのような条件のもとに落ちるか分からない。それが種の命の始まりです。

この種のその後はどうなったのでしょうか。どのように大きくなったかということ。実りをもたらすまでの途中、中間のことです。道端に落ちた種。道端とは道の横です。道の傍らです。それでも人に踏みつけられ、空の鳥に食べられてしまいます。この鳥というのは、たとえば鶏とか、そういった家で飼っている鳥ではなくカラスのような野生の鳥です。もしきちんと畑に落ちていけば、ついばまれることもなかったと考えられます。芽を出すこともできなかったのですから生育することはまったくありませんでした。

石地に落ちた種の間はどうだったのでしょうか。石地とありますが、直訳すれば石の上ないし岩の上です。多少土がかぶさっていた。したがって種は芽を出します。種はしばし成長します。しかしそもそも土がなく水も十分ないわけですから、成長はす

ぐ終わってしまいます。

茨の中に落ちた種はどうだったのでしようか。茨の中とは、茨のまったただ中という言い回しです。茨も茂っています。土地は肥沃です。そこに落ちた種も芽を出し成長する可能性は大いにあります。じつさい成長しはじめます。しかし茨の生命力が勝っていて、それに塞がれ、実を結ぶには至りませんでした。

さて最後に「良い土地」です。「良い」といっても何が良いのかは示されてはいません。石地に比べて石が少ないから良いとか、茨の中と比べ、雑草が少ない、だから良いといわれているわけではありません。「良い」を判断する手がかりはここにはありません。結局、良いというのは、実りをもたらしたということ、「百倍の実を結んだ」ということに結びついています。

こうして道端の種は芽も出さなかった。それ以外は芽を出しました。石地は次がつかなかったという点で失格です。種の命の終極、実りをもたらすという点では、茨の中の種もだめでした。実らなかった。良い土地に落ちたものだけが豊かな実りをもたらした。同じ種でも、その落ちた土地によって、成長も実りも違う、いや実らないこともある。とくに農業を知らなくても、私どももみなよく知っている自然世界の出来事です。以上がたとえのあらましです。

2 どう聞くべきか

イエスの解説にも目を向けることにしましょう。種とは「神の言葉」です。神の言葉は、種のように、私どもの中で、発芽し、根を張り、成長し、やがて実りをもたらす。そうした力が神の言葉には秘められています。その内在する力に信頼することが私どもにとって大切なことはいまでもありません。とはいうものの、種としての神の言葉は、時間がたてば、ひとりでに実を結ぶに至るのだというのではない。種としていたでいて神の言葉を、私どもがどのように聞くのか、どのように受けとめるのか、それが問われているのです。

種の命の始まり、その途中、そして終極における豊かな実り、じつさいそこまですなる種は多くない、少ないというのが、このイエスのたとえの意味です。なぜこうしたたとえをこのとき語るようになったのでしょうか。

大勢の群衆が集まり、方々の町から人々がそばに來たので、イエスはたとえを用いてお話しになった（四節）。

なぜ種まきのたとえをイエスは語られたのか、この四節にその理由が書いてあると私は思っています。簡単にいえば、大勢の群衆がイエスのところにやって來たからこのたとえを語られたのです。人びとに、神の言葉をどう聞くか、その聞き方に注意せよとイエスは語っているのです（八・一八参照）。

聞き方に注意しなければならぬのは、大勢の人びとだけではありません。むしろイエスの弟子たちこそ、そうでなければならぬ。その頃イエスの弟子たちもいろん

な人が加わり、だんだん充実してきていたようです(五・一、二七、六・一一)。
一二人の弟子のほかに多くの婦人たちも加わったということが、今日の箇所の前、
八・一、三にあります。こうしたことがイエスがこのたとえを語り出すきっかけだ
たのです。

その意味で私どもは、ここでもくり返し用いられる「聞く」という言葉に注意しなけ
ればならないのではないのでしょうか。私どもの生活は「神の言葉」を聞くというこ
ろから始まるからです。

道端のものとは、御言葉を聞くが、信じて救われることのないように、後から悪
魔が来て、その心から御言葉を奪い去る人たちである。石地のものとは、御言葉
を聞くとき喜んで受け入れるが、根がないので、しばらくは信じていても、試練に
遭うと身を引いてしまう人たちのことである。そして茨の中に落ちたのは、御言
葉を聞くが、途中で人生の思い患いや富や快樂に覆いふさがれて、実を熟するま
でに至らない人たちたちである。良い土地に落ちたというのは、立派な善い心
で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである(一一・一五節)。

どうでしょうか。実を結ぶに至るのも「聞く」ところから始まります。聞いて、次
に来るのはこれを「受け入れる」ということでしょうか。それはまた「信じる」とい
うことです。信頼するといってもよいものです。

この、聞いて、受け入れ、そして信頼することへの過程で、私どもは、しばしば、
ここにいわれているような「人生の思い患いや富や快樂」によって脅かされること
になります。

思い煩い、それは二心、神と世の二心です。富とは、神に代わって私どもに安心を
得させるもの、保証するものと見えるでしょう。快樂は、それがどのようなものであ
っても、結局は、神への関心を、また隣人への関心を、私どもから奪いとっていくも
のです。私どもは神の国への途上にあります。中間の道を歩んでいます。御言葉に固
着し、そうする中で私どもはさまざまな試練に打ち勝ち、忍耐して実を結ぶに至るの
です。決して自動的にそうなるではありません。

御言葉に聞く、これが始まりであると申しました。御言葉とは、私どもにとってイ
エス・キリストです。イエスは私どもに対する神の語りかけそのものです。この方に
聞くということです。このイエスを聖書が、聖書だけが証しています。したがって
神の言葉に聞くということは聖書に聞くということでもあります。聖書の証しするイ
エス・キリスト、その福音、私どもすべての者を神の子とし、恵みによって生きるこ
とを許してくださったということ、これに聞き、途中の試練にも、脅かしにも、誘惑
にも屈することなく実りを得たいものです。

3 良い土地

今日の箇所は、直前、八章のはじめの数節と無関係ではないということを示すに申

し上げています。

改めてそこを見ると、イエスは神の国の福音を宣べ伝えながら町や村を巡って旅をつづけていた。一二人の弟子も従っていた。それだけでなく、何人か、名のあげられた女性たち、マグダラのマリア、ヘロデの家令であったクザの妻ヨハナ、それにスサナ、また「そのほか多くの婦人たち」も一緒だったことが伝えられています。これら有名・無名の女性たちについて聖書はこう書いています。

彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた（3節）。

そしてすぐにこの種まきのたとえです。ですからたとえの「良い土地」とはこれらの女性たちのことであり、彼女たちの生き方の説明をイエスがなさっているとも私には読めるのです。名前のある人もいます。名前の上がついていない人もいます。しかし彼女たちこそ「立派な善い心で御言葉を聞きよく守り、忍耐して実を結ぶ人たち」にほかならなかった。

彼女らのことも念頭にあってイエスはこの種まきのたとえを話されたのではないかと申しました。しかしその彼女たちとて、はじめから「良い土地」であったわけではないと思います。

しばしば誤解されることは、この種まきのたとえが、人間のタイプを論じているのだということ。日曜学校やキリスト教学校で取り上げられるとき、そうした説明がなされないように願いたいと思います。

道端のような人、石地のような人、あるいは自分の中に茨と神の種と一緒に抱え込んでいる人、そして良い土地の人。いずれにしても、とても私は「良い土地」などではないと考えることがあります。そのようなことを思わせる、宿命論的な人間の類型をイエスはここで取り上げているではありません。

むしろこうです。道のような心、かたくなな心、石地のような心、熱しやすく冷めやすい心。茨も一緒に育っている心。感性が豊かなだけに実を結ぶにいたらないような心。それは、ちよつとずつ、私ども一人ひとりが、自分にもっているものです。強弱大小はあってももっている。そして「良い土地」とは、まさにそうした私どもの中にある、頑なな心を、浮ついた心を、悪しき思いを、そうしたものを克服していくところに、恵みによって、思いもかけず開かれて来るものだといってよいように思います。はじめから決まっている人間なんてどこにもいません。

その意味で心を耕すこと、柔らかい心として、神の言葉が成長しやすい心となるように自らつとめるといふこと、そのような努力が良い土地を生みます。それは年齢などとは関係がありません。種とは、神の言葉、イエス・キリストです。この方がすでに私どもの心に宿ってくださっています。私どもの歩みに豊かな実りをもたらしてください。私どもはそれに信頼してよいのです。そうした信仰の歩みをご一緒につづけてまいりましょう。

(二〇一九年二月二四日)